

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！

社共にかわる革命的労働者党を創建しよう！

1999年4月10日

《毎月25日発行》

第210号 4項200円

年間定期購読料（送料込み）

開封2500円／密封3000円

赤旗

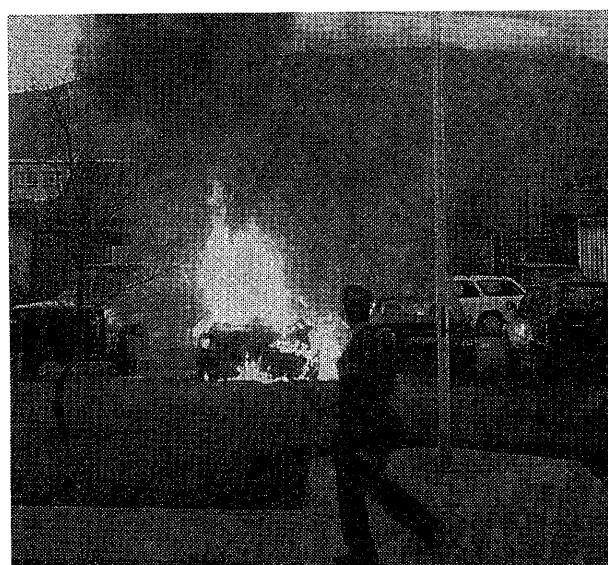
共産主義者同盟中央機関紙

(1980年2月28日第3種郵便物認可)

発行
赤路社

埼玉県新座郵便局私書箱47号
郵便振替：00590-0-20004
(関西)大阪港郵便局私書箱40号
郵便振替：00940-1-132778
E-mail
ga3129@i.bekkoame.or.jp

99春闘から21世紀の闘いへ



空爆抗議のデモ隊に焼討ちされるマケドニア大使館

三月二十四日、米軍を中心とした北大西洋条約機構(NATO)軍は、ユーゴスラビア連邦全土に対するミサイル攻撃・空爆を開始した。いかなる口実を設けようとも、対イラクなどで錦の御旗にしていた国連決議ではなく、しかもれつきとした主権国家に対する攻撃は、侵略戦争以外の何ものでもない。米帝に主導されているものだが、NATOが「欧洲の警察官」としての地位を求めているということである。とりわけ、独帝の初の海外参戦は、日帝の戦争への熱望を刺激するであろう。ただちに反戦闘争にたちあがろう。

NATOの空爆運動

完全失業率が、戦後最悪の四・四%(一九九九年一月)に達し、さらに数十万・数百万人の労働者の首切り・リストラが強行されている。恐慌と大失業の時代が、今日の情勢の基調となつてゐる。日帝ブルジョアジー・政治委員会＝政府は、日米安保体制の飛躍・新「ガイドライン」を九七一九年八年の過程で日米合意し、何がなんでも九九年今春期の国会で強行しようとしている。さらに、新破防法三法案の成立、憲法調査会の再編・確立、戦域ミサイル防衛(TMD)構想の確立をめざして、一月十四日にはついに自立政権を誕生させた。

世界恐慌の進行下、タイ・バーツ(アジア危機)、ロシア危機、ブラジル(南米危機)、これらが米帝・日帝足下にまで及ぶこととなり、G7・IMFなど、各

世界恐慌の進行下、タイ・バーツ(アジア危機)、ロシア危機、ブラジル(南米危機)、これらが米帝・日帝足下にまで及ぶこととなり、G7・IMFなど、各

帝国主義は協調体制をめぐらすが、いままで、米帝・EU・日帝の国際反革命同盟体制と対立の下で、ブロックごとの救済を迫られる形となり、ますます対立抗争を強めざるをえない。

しかし、一方で第三次帝国主義間戦争を推進することは不可能であり、国際反革命同盟体制を各々一方で強めつつ、「第三世界」労働者階級・人民へすべての矛盾を押し付けることしかできないのである。

日帝独占資本・自立政権は、このような情勢下、六十兆円の公的資金や二十五兆円の融資を特別投入して金融資本の救済に全力をあげながら、すべての矛盾を労働者階級・人民へ押しつけて、体制を維持、乗り切らんとしている。

第一に、長期不況、恐慌下で、

第三は、それらを法的に保護していくための法律の改悪－労働組合法、労働基準法、労働委員会制度、派遣法の全面改悪である。

かかる金融資本・独占資本の道、労働者階級・人民への歴史的な抑圧に対して、既成政党は部分的に修正意見を表明する

だけ、まったく総保守独裁

第三は、それらを法的に保護していくための法律の改悪－労働組合法、労

勞動運動論——独倉編

芹田保徳

沖縄闘争について

一九二五年一三〇年頃のたたかいは、党的には、「社会主義に強行に転化する民主主義革命」「民主主義的課題を持った社会主義革命」という綱領路線と党建設においてブレはあつたが、全体としては、党が基礎土台建設に入り、大衆闘争は、労働運動において同盟をしのぐ勢力を評議会が形成する勢いを示し、大いに前進した時期であった。弾圧・解体されたとは言え、歴史的たたかいであった。

依拠して辛うじて生きていた。農民は農民組合の下、土地解放のたたかいへ、人民大衆は「米よこせ」「物よこせ」とたたかい、労働者階級は、賃金、反合理化のたたかいに決起し、労働者階級・農民を軸に全人民が、反天皇、反資本、反地主のたたかいに立ち上がり、四七年二・一ストリトによって政府を打倒しようとしていた。職場では労働者が支配権を確立しており、政府一國家権力の打倒が目前に迫っていた。しかし同時に、アメリカ帝国主義占領軍は、全土に進駐していた。社会主義革命から民族解放のたたかいへ、逆説的ではあるが、前進する道が待つていた。

命に留めることによって、平和的に権力奪取を実施し、援助を受けようとした。そして、米帝軍に大弾圧を受けて、労戦は、総評解体され、最後に日本共産党は、国会、新聞社、職場から數十万人が追放された。産別は、総評に再編された。綱領の誤り、戦術の誤り、指導上の大誤り、まさに敗北のデパートである。労働者・人民が社会主義を目指す、革命を目指す質にまで踏み越え、たたかおうとしている情勢に、党は全く妨害者、敵対者となり、大衆から失望されていった。まさに革命的労働運動が、社会主義との結合が、党との連携が形成されていたのに、その革命性、階級性を解体したのである。

に、綱領的・実践的に反対した
三池闘争は、総資本と総労働

ベトナム反戦

沖縄

戦闘争にについて

闘的労学のたたかいが形成された。
①労働者階級人民全体としては、革命的質、量ともに形成してはいなかつた。
②粘り強く階級形成しつつ、党一大衆戦線の確立をたたかいたる持続性、粘りにかけていた。
急進主義的突撃は、人民大衆との乖離を拡大し、後退期に孤立と批判を浴びることになつた。

はろくにたたかい抜ける闘争にはなかつた。ひとえに、三池当

としての結集軸を一定解体され、一方でバブルが進行した。しかしその年代にはいると、それが、全国全人民の量においては未形成であつた。

において反撃を開始した。日本においても、この間十数年来、勞働界で開してきた労働者階級・人民が各戦線・地域のたたかいと連動して、自己のたたかいを再編しつつある。

吉本成動、想務産動効に、考

い。革命的労働運動の時代、労働者階級が階級として革命性を發揮する時代は間近である。

①労働者階級・人民の運動に連動し革命に備えるためには、党建設が必須である。正しい綱領・戦術・強大な党を建設しなくてはならない。

②労働組合—労働運動を軸に大衆を結集すること。市民運動・組合主義運動・クラブ運動を並進することに遅れはならないが、あくまで労働者階級の階級形成が第一であり、そのためには労働組合を軸としなければならない。

③労働組合を小から大まで、どこでも組織しなければならぬ。全ての労働者へ、階級的

上岡は らに敵の推進に 上岡に を免な

一九四五—五〇年の戦後革命に敗北した日共一産別会議にかわって、社会党一總評が、米帝占領軍の支援の下に結成（一九四九年）された。總評は、五年には、社会党（左派）が左旋回し、平和四原則、朝鮮戦争反対をスローガン化し、人事も交替した。その後、経済復興の過程で経済闘争中心になり、春闘方式が定着し、その過程で、労働者人民大衆がたたかえばたたかいい、後退すれば議会主義に退き、労働組合主義が拡大し、社会党

が一定定着した。

総評は、一九八四年（実質一九七九年）まで続いたが、その過程で、六〇年安保一三池闘争といいう戦後最大の大闘争、六九年に反戦がたたかわれた。これら二つのたたかいは、戦後をする三大闘争の二つとなつたが、いずれも日本共産党が闘争指導に関わらないたたかいといいう特殊な面を持つていた。

野派）一總評と日共反主流派（ア

国家・経済・大学その他の機能が完全にストップしたたかいであり、文字通り日本全土を二分したたかいであつた。量において大戦争であったが、質においては、階級的たたかいではあつても革命的たたかいではなくかった。社会主義と結ぶ労働者階級・人民の質は未形成であつた。日共は、このたたかいの反米の側面ではたたかつたが(六・一〇ハガチ一闘争)、全体としては、たたかいを低め、解体し、抑圧した。労働者階級・人民が

労働戦線を資本の支配へ再編しようとする動きは、元々七〇年代から繰り返し行われてきたが、その都度「左バネ」という形で運動におされて失敗してきた。しかし、七〇年代後半から八〇年代にはいると、日本帝国主義・政府も戦後体制の再編、政界再編が叫ばはじめ、支配側、右翼労戦からの執拗な攻撃によって、各産業が統々と右翼編され、総評も路線・人事共に、右派に握られることとなつた。

八五年を契機として、連合の成立(總評の解体)、それから政界再編も進み、日本新党、さきがけ、社会党の分解、新進党由党、民主党、続々と総保守化が進行した。帝国主義ブルジョアジーの支配の再編、規制緩和、グローバル化が進み、八五年から九五年にかけての十年間、労働者階級人民は、後退を余儀なくされてきた。重厚長大から軽薄短小へという産業構造の変容の中での、労働者階級は、階級

労働者階級を無視して蜂起する
一これらは誤りは多くある。また今日、単純な資労働と資本の
対立が存在するわけではない。
現象的には、重厚長大と軽薄短小の構造は二重化されており、
二重の組織構造化にあり、われ
したとき党が立ち遅れる。党が

国家権力を打倒しプロレタリア独裁ではなくて階級と人民の支配を確立し、社会主義と労働者人民を結合していくたかいを継続しなければならない。

連合一民主・社民は、帝国主義の戦争国家化に対して、反対

立は主結り
ソシガトコトニテ、現在直下にコトニテ、
ロレタリアの人間、革命的人間
を創造する等、という間違いは
絶対してはならない。
労働者階級の革命性をたたな
いのなかで引き出し、連動し、
常にねばり強くたたかい抜くこ
とに尽きるのである。

レ　カ　は　間　ノ

60年安保・三池の闘い

連合—総保守化支配の成立 とその破綻の始まり

とその破綻の始まり

本紙の定期購読を（お申込みは赤路社まで

本紙の定期購読を（お申込みは赤路社まで）

釜ヶ崎反失業闘争

大阪市府前野當閻争に突入

釜ヶ崎の反失業闘争は、三月一日より大阪市庁舎前での野営闘争に突入している。

昨年度は、三度に渡る野党闘争や粘り強い対市府交渉が展開され、昨年十月十六日に土地九百坪の提供という一步前進の回答とその後二月末までのセンター夜間開放の成果を実現してきました。

③生活ケアセンターの拡大(七十床)、④新規保護施設建設(二年後)をあげてきた。従来から大きく前進したものではなく、一方で「これら施策が理由による国家規模での対策が必要」と根本問題に対しても繰り返すのみであった。

二月二十六日、二月末の期限切れ直前に市交渉を行うも進展がみられず二月末をもってセ

二月二十六日、二月末の期限
切れ直前に対市交渉を行うも進
展がみられず二月末をもってセ
であるた

ント村二百二十名など少なくとも千名強が野宿を強いられた。緊急に千名枠での緊急シエルターとの反対の再三の要求を市が回答できない限り、野宿の仲間は寝場所と仕事を求め自ら市に対して回答を求めて二月一日夜より大阪市庁前南側遊歩道にブルーシートのテントを張り野営闘争に突入したのだ。

が、夜間でも五百名が泊まりこんでいる。淀屋橋では市民への理解を訴えるビルが配られ、コンパが要請される。十三日までに六十二万円のカンパが寄せられた。

反失連は三月十日、改めて文部省・府労働部に対し「早急にセンター夜間開放を再開せよ」との要求を提出した。市は磯崎市長が府に対してセンター開放

日本初の「脳死」 差別

判定」「臓器移植」

強行される の進行を

成 器 千 犯
弾する

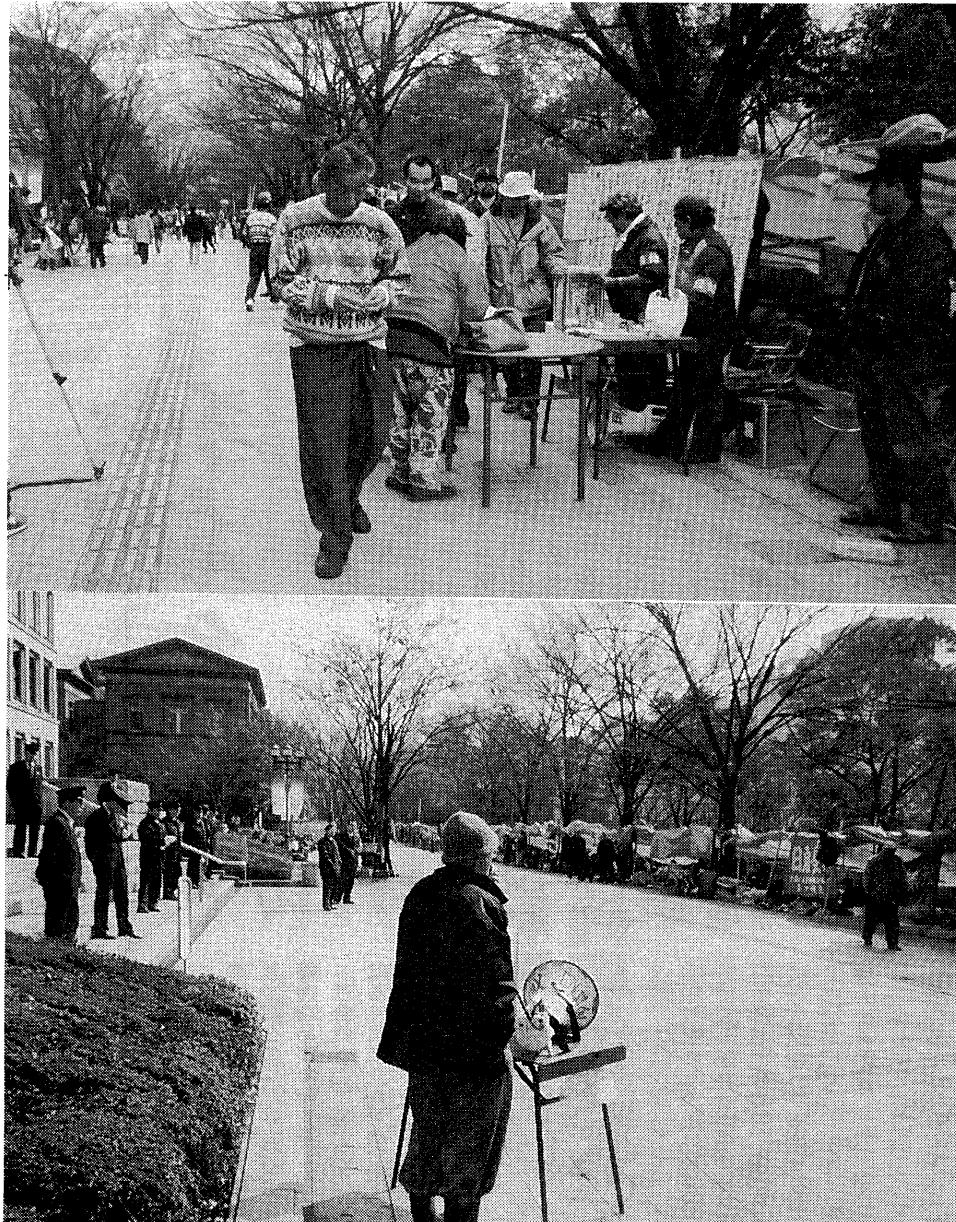
の要求が反失連より出ている」と
の要望を提出したこと。
が、府は「開放しない」との返
であつたことが判明した。三二
十六日、反失連は百五十名の公
表団を中之島市庁前より徒步
府労働部へ派遣、交渉に入つた場
その中で、労働部は、市に対
て「センター開放を行つた場合
の次のビジョンを示せ」と逆に

冒した月代事に合でし。されば、質問を突きつけている」とがつきりした。十七日には市民当局自らが記者会見を行い、「府市共同で協議に入った」と報するものの、一部では「白紙状態」との報道も行われ、反失業率は十八日、市民生局と交渉態勢を迫った。市は「白紙状態ではない」と回答するも、肝心のセンター開放への前進はみられな

生は告度運状況を許さない。

かつた。
この間二月十二日、三月九日、
と全国五自治体を集め、「ホームレス問題連絡会議」が行
われている一方で、八月を目安に
に総合施策を出すとの方向が示
されつつも、一方でテント村等
去のための法整備が必要といい、
強硬的面も検討されており予断

日行處処示撤つ断の労働者は、アブレの仕事求め、大阪市内で野宿も強いられる一万人を越す仲間がいる中で緊急避難所設置を求め、寒さと雨の中で七百名が坂市庁前野営闘争を続ける。春期闘争も始まる。釜ヶ崎失業闘争は続いていく。



【写真上・下】釜ヶ崎反失連による大阪市庁前での野営闘争

しかし翌二十六日より再び臨床的脳死判定が行われ、家族も同意し二十七日に第一回目の「法的判定」が行われ二十八日午前〇時頃二回目が行われ「脳死」と最終判定され、午後には摘出が行われ、ヘリコプターまで動員し、全国五施設で六名の患者

前号の記事の訂正

一面最下段「主催同縦鼻会」↓「主催同準備会」
二面七段目「アルジエリア軍提供」

→「アルジエリア製